

認証の森から発信する信頼の家づくり

宮崎県諸塚村企画課長補佐
兼 諸塚村産直住宅推進室事務局長 矢房孝広

森林認証と環境時代の森林指標

21世紀は環境の世紀といわれ、地球規模で環境汚染、地球温暖化、資源の枯渇などが叫ばれ、社会や生活はもとより、あらゆる経済活動においても環境に配慮した行動をとることが、全世界の共通認識となっています。

7月のクレンイーグルス・サミットでも、環境に悪影響をもたらす木材の違法伐採対策が合意されたほか、地球環境の保全のための森林の適正な管理を第3者が保証する森林認証制度が、世界的に広がっています。

日本人は、里山に象徴されるように昔から森を守り、森の恵みを生かしてきた民族ですが、林業不振から森林が荒廃し、台風災害、水不足など環境悪化が顕著です。森林は、適正に管理し、林産物の適正な活用を図ることでその環境保全機能を維持できます。すなわち森林を守ることは公共的な活動であり、それを享受する街からの声です。

そしてその森林管理の質と持続性を、第3者が評価・認証するのが森林認証制度です。

宮崎県諸塚村は、昨秋に国際認証であるFSC森林認証を取得しました。村と森林組合および林業作業の第三セクター「財」ウッドピア諸塚、そして、一般林業家も含めたグループ認証で、日本で初めて村ぐるみで認証の取得を実現しました。

森に生きる村・林業立村100年

諸塚村は、九州山脈の奥深く、天孫降臨伝説の地・旧高千穂郷の一角にあります。急峻な山間の僅かな平地に点在する88の集落に、村民2200人、780世帯が暮らす森深き山村です。村上の95%を占める山林の大部分が民有林ですが、大規模林家は少なく、村内に住む所有山林面積20%の家業労働的な中規模林家が中心です。

スギ、ヒノキの針葉樹とクスギ、ナラの広葉樹およびカシ、シイ、ツバキの照葉樹林が混交するモザイク林相と呼ばれる、手入れが行き届いた森

宮崎県諸塚村は、九州山脈の奥深く、旧高千穂郷の一角にあり、人口約2200人の村。



が拡がっています。水質保全と生態系にやさしい環境共生の美しい森です。

決して経済的に豊かな村ではありませんが、人づくりに向け、明治期から山と共生する村づくり、林業立村に取り組んで100年の歴史を刻んでいます。総合長期計画では、村全体に広がるこれらの自然の資源と素材で人情あつい地域性をまるごと生かし、都市と交流する全村森林公園化構想を大きな柱に据えています。

世界標準で山を守る誇り

FSC森林認証取得によって、諸塚型林業として長年続けてきた適切な森林管理に、世界基準のお墨付きを得ることが出来ました。それは森を守る林業の社会的責任を果たしている保証でもあり、なにより先人たちが築いてきた歴史ある森づくりが評価されることで、林業家の誇りを取り戻すことにもなります。木材価格の低迷で自信を失いつつある林業家が、林業を子どもに語り、世代を繋いで森林管理や林業経営を継げる意欲を持つことを可能にします。

顔の見える流通の構築

現在の流通の重要なキーワードは、トレサビリティ（履歴管理）です。生産者や生産工程、流通の情報を開示して、生産者とユーザーの「顔の見える信頼関係」を構築することを目標としたシステムです。木材の場合、その流通を考えると木が採採されてから丸太、製材工場、製品工場、建築現場まで、多くの工程と複雑なルートを持つため、一般的には履歴管理が困難です。

しかし、これからの林業にとって環境に優しい森から生産される製品を、一般のユーザーに届けるためには、ユーザーが履歴を識別できる流通にすることは不可欠です。

諸塚村は、年間3万立方メートルを超える原木を生産している日本有数の木材産地ですが、村内のほぼ全木材を森林組合が取り扱っており、しかも自前の木材加工センターによって、製品をダイレクトでユーザーに届けることができます。

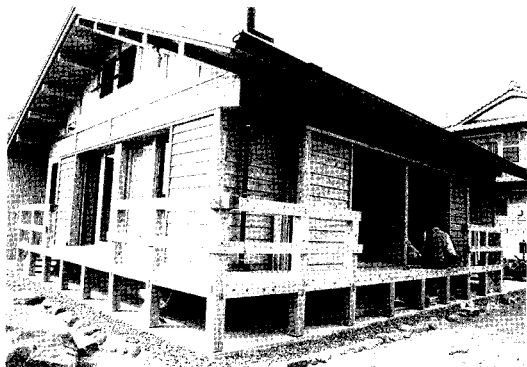
森林からユーザーにわたるまでのすべての生産・加工・流通過程で分類表示し、工程管理するシステムであるGOC認証を、諸塚木材加工センターが、昨秋の森林認証取得と同時に取得し、全国トップクラスのFSC認証材製品の生産と流通基地が実現しています。



施主による木材検査



都市と山村との交流を図る木材産地ツアー



諸塚産材を使用して建築された産直住宅

諸塚村方式産直住宅

顔の見える家づくりの先駆者として、貴重な森林資源を、都市民と共に守りながら育てて行こうと、10年前から産直住宅事業が進められています。木材を含めた森林資源や自然、地域の文化を生かした都市と山村との交流を図ることで、村民が誇りと自信をもてる村づくりをしようというエコビ

レッジ諸塚プロジェクトがベースです。

自然素材を使った家づくりの提案や、山村生活の体験など地域資源、地域の素材をそのまま活用した企画をして、その交流の中で山村文化を再評価する作業を意図的に行い、単なる素材の直売や観光開発に終わらない、人にも、地球にも優しい生活提案型の交流運動の展開を図っています。その積み重ねで、地域の人々が自らの地域社会を研究し、自らの未来を自ら創造するようになることが最終目標です。

広がる認証制度とこれからの林業

現在全国でFSC森林認証取得地が徐々に増え、規模的にも一定の波及効果が期待できるところまでできています。

また、日本型森林認証であるSGECも昨年からはスタートし、全国的に広がっています。

しかし、一方で肝心



諸塚産材にはFSC森林認証マーク入

の森を守っている林家は、全国的に見ても大規模な組織は少なく、木材価格の低迷や採算性の低さ、産業としての基盤の弱さから徐々に衰退しています。兼業の小・中規模林家の多くが、儲からない山の経営から手を引き、さらにこの数年の暴落によって、大規模林家までもが、山林を伐採し、その後植林しないで山を棄てるという、深刻な「放棄林」が増えていると聞きます。

サミットでの違法伐採対策の合意を受けて、先日政府機関が、来年度からの木材原料を合法的に伐採された認証製品に限定する方針を打ち出しました。国産材についても例外ではなく、そのシステムについて近く業界内での協議会が設置されるそうです。国産材であればいいという訳ではなくなっているのです。

これからは、木を伐ることの大切さを訴え、地球を守る林業という認識を明確にし、さらに認証制度によって環境を守る山の情報開示を進めるなど、ユーザーとの相互理解を深める必要があります。それによって、適正に管理された森林からの資源を、ユーザーが積極的に活用できるようなエコロジーな認証製品の流通網ができるようになります。

これを機会に山が自ら動き、山と街が一緒に考え、新しい流通を生み出すことで、森林を守り、地球を守ろうという試みが着実に広がることを期待しています。